

大塩平八郎雑感

井上 宏

最近大塩の乱の意義や、大塩平八郎の人間性について感じたことがあるので、二三述べる。

一・明治維新と大塩の乱

今年(明治維新一五〇年)は昨年(大塩の乱一八〇年)は維新の三一年前に起こった大塩の乱は、維新の先駆けであると言われる。島原の乱以来二〇〇年にして、初めて幕府に刃を向け、反抗の切掛けを作ったのだから当然だろう。しかし、維新後の日本の姿は、大塩の目指したものとあまりに違い過ぎる。

吉田松陰の弟子たちが作った「皇国日本」は民が天皇のために死ぬ日本であった。松陰が教えたのは、「三民の首」である「士」が「天日の嗣」のために死ぬことだが、皇国日本では「民」がその役割を担ったのだ。

一方、大塩が目指したのは「万物一体の仁」「修身齊

家治国平天下」。為政者は民の痛みを我が痛みとし、民の平和のため我が身を修めなければならない。孟子曰く「民を貴しと為し、社稷(国)これに次ぎ、君を軽しと為す」(孟子尽心章句下)。

大塩は民のために立った。その挙が先駆けとなり、後に続いた維新が実現した国家を見て、泉下の大塩はどう思っただろうか。

今また、我が国は長州出身者を宰相としていただいている。彼が言う「美しい国」の向かう先はどこだろう。

二・大塩平八郎の人間性

大塩を「思想のみで突き進む人物」「厳しく険しい人間」「独りよがりな激しい性格」とする見方が一般的で、大塩ファンではない私も、実はそう思っていた。

しかし、研究会で勉強する内、大塩の意外な側面を知

ることになった。その内二つばかり記す。

まえなければなるまいな

※梵王宮Ⅱ仏寺。繚纒（るいせつ）Ⅱ罪人として捕らわれること。

五更Ⅱ寅の刻、午前三時から五時頃。（現代語訳は福島先生）

◆漢詩に見る大塩平八郎の人間性

平成二八年七月、帝塚山学院大学・福島理子先生による講演「大塩平八郎の詩心」があり、次のような詩が示された。

私はこの詩に、市井の人に注ぐ大塩の暖かな視線、世評とは異なる寛容さを感じるのだが、如何だろうか。

箕山の楓を尋ぬるに人の其の一枝を誤るあり。山僧

◆大塩平八郎純愛物語

石崎東国著『大塩平八郎傳』（大正九）に次の記述がある。

集まりて之を拘へ面縛す、予其の無知なるものもの妄作して此に陥るを憫み、且つ僧の為す所の慈ならざるを悪む。故に僧に告げて以て其の囚を釈さしめ、戯れに絶句を賦して其の僧に贈る

律嚴法具梵王宮（寺のおきては厳しく、きまりも

いろいろあるのだらう）

赤子猶懲繚綫中（かよわい民すら罰せられ、繩に

かけられるとは）

楓葉谷看不容損（紅葉を見るのは良いが、折つては

ならぬというのなら）

明朝定捕五更風（私は明日、夜明けに吹く風を捕

洗心洞餘瀝云 大塩の家内のことで御座りますか。私が塾に居りました頃におゆうと申ます妾が置いて御座りました。此の人が大そう豪い人で大学を暗記して居られました位で、折節は先生に代て中庸や

